

わんりい

157号
2010/10/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。



「パキスタンの農婦」

撮影:今村 旭(ネパール教育支援/NPOネパール・ミカの会)

‘わんりい’ 157号の主な目次

北京雑感(48)「本屋さん」	2
農民画(13)「中秋の贈り物」	3
松本杏花さんの俳句集・「千里同風」より	3
私の調べた四字熟語(46)「不得要領」	4
【活動報告】手づくり月餅の会	5
媛媛讲故事(27)「八仙の伝説Ⅶ・藍采和」	6
アジアを読む(70)「歴史の視点・私の雑記帖」	7
フィールドノート(4)「陝北の剪紙、ことはじめ」	8
黄土高原・やぶにらみの旅	11
スリランカ紹介(42)「スリランカの世界遺産Ⅴ」	14
私の四川省 一人旅(39)「稻城で」	16
アフリカとの出会い(46)「ナイロビのOL事情」	19
‘わんりい’ 掲示板	20

【表紙写真説明】 イスラム圏のパキスタンで、女性がこのような素敵な笑顔を見知らぬ旅人に見せるのは珍しい。インダス河沿いのカラコルム・ハイウェイをフンザに向けて進む途中の、農村でのワンショット。カメラに心からの笑顔を見せてくれた感動の一コマである。(今村)

(キヤノンT90/フジカラー 400)

全員集合!! 第12回町田発国際ボランティア祭
2010夢広場 ～この星に平和と希望を～

10月31日(日) 10:00～16:00
於:まちの駅「ぼっぽ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている町田市と町田市周辺のボランティア団体が集結! エスニック料理いっぱい! 民族芸能いっぱい! そして、エスニックグッズもいっぱいのお縁日! 世界を体中で味わおう!

- 主催:2010夢広場実行委員会
 - 共催:(財)町田市文化・国際交流財団
- 問合せ:☎042-722-4260 町田国際交流センター

最近、テレビで、職を失った日本の若者が、リヤカーに積んだビジネス書をオフィス街で売る新しい商売に挑戦し、手ごたえを感じ始めたというニュースを見ました。「取り扱う本は必ず自分でも読んで、内容を把握した上で、自信を持ってお客に勧める」と言う姿勢に、若者らしい気概を感じて、商売の成功を祈り、応援する気持が湧きました。

リヤカーで売り歩く本屋さんと言えば、北京でも良く見かけました。中国の新刊書販売システムがどうなっているのか詳しいことは分かりませんが、日本と決定的に違うのは、本屋さんでも新刊書の値引き販売が行われていることです。最近では、日本でも新刊書を値引きして販売することが許されて、定価より安い値段で売られる本を時折見かけるようになりましたが、まだ余り多くありませんね。

北京では、常時、新刊本を定価より安く販売している本屋さんがあります。特別な表示は無いのですが、口コミで、「あの店は1割5分引」とか、「こちらは1割引」とか聞いて、学生達がよく利用しています。勿論、我々が何も知らずに買っても、ちゃんと値引きしてくれます。新刊本が定価よりも安く買えると、値引きの額以上に得をしたような幸せな気分になります。また、店によっては、特別な棚を設けて、「この棚の本は2割引」などと表示していることもあります。いずれにしても、本の定価は日本よりもぐっと流動的ですが、勿論、本屋さんの全部が安売りをしているわけではありません。

そんな中、自転車で引いたリヤカーに本を積んで売っている人達があります。路を歩いていると、歩道上で店を広げているのを見かけます。毎日ではありませんが、同じような場所で違う人がリヤカーを止めていることがあります。随分多くの人達がこの仕事をしているのでしょう。しかもこの本屋さん、殆どが一冊10元です。落丁乱丁などは無く、表紙も綺麗なちゃんとした新刊本です。タイトルが興味深そうだと、直ぐ読む積りは無くても、思わず買ってしまいます。この本屋さん、一般の新刊書が10元だけでなく、《ハリーポッター》の英語版最新刊本も10元で売っていました。

発売されたばかりで、大きな本屋さんでは、平積みにして宣伝しているものなのに、どうして此处で10元なのか不思議でした。中国の友人によると、これは海賊版で、正規の著作権を得ていないので安く印刷できるのだそうです。時にはCDを売っていたりするので、当然それも海賊版なのでしょう。こんな話を聞くと、安いのは嬉し

いけれど、買って良いものかどうか、複雑な気持ちになります。

このリヤカーの本屋さんの他に、歩道橋の上では地面の敷物に同じような本を並べて売っていることがあります。此处では10元よりも安いものも有ります。時間のある時に覗いてみると、掘り出し物が見つかることもあります。こんな所は、流石に文字の国中国だと感心させられます。

ところが、北京では文字通りいたるところにある本屋さんが、今年夏に訪れた黄土高原の延安・延川では見つかりませんでした。陝北地方の旅は現地の友人にすっかりお任せで、連れて行っていただく場所も地名だけで、それがどの辺にあるのかすら分からないので、訪問地近辺の地図を買って確認しようと思いました。ホテルには無かったので、街の本屋さんで買おうとしたのですが、街の人、誰に訊いても本屋さんは無いと言うのです。そんなことは無かろうと、走る車の中から街並みを注意して見ても本屋さんらしきものは見当たりませんでした。どうも本屋さんとして独立した店舗はないようで、結局地図は西安へ行くまで買えませんでした。

西安でやっと買えた地図は、西安の市街地図と陝西省地図だけでした。陝北地方の詳しい地図が欲しいと思ったのですがありませんでした。9月号わんりい誌上で丹羽さんが書いておられた、地図を必要としない人々のお話で、ホテルに付近の地図はおろか、延安・延川の市街地図さえ置いていない(売ってさえいない)事実が、スナリと腑に落ちました。

地方の市や県(中国の県は市より小さい)に本屋さんが少ない、或いは無いことを実感して、北京の本屋さんで見た光景が思い出されました。ご存知のように、北京の中心部には規模の大きな本屋さんが何軒かあります。その規模は、日本で一、二を争う大規模書店と同等、或いはそれ以上のものですが、何時行っても人が溢れています。その人々が買う本も我々の常識を超える量です。外資系のスーパーマーケットで使っているような大きなカートに何十冊もの本を積んでレジカウンターに並ぶ人が大勢います。初め、図書館関係の人が買いに来ているのかと思いましたが、どうも違うようです。北京の友人に訊くと、「田舎から出てきた人が、他人に頼まれたり、自分の読みたい本を纏めて買って行くのだ。」と説明してくれました。それにしても、その量が半端ではないので、友人の説明に半信半疑でしたが、今回、陝北地方で本屋さんが少ないのを実感して、初めてこの説明に得心しました。

1年で月の最も明るく輝くころ、中国の農家にお邪魔したらこんな風景に出あえるのでしょうか。

中国江南地方の伝統的な藍印花布（藍染の布）の深い藍色の上になぎやかに並んでいるのは、知人友人からの贈り物や、収穫したばかりの野菜や果物。

家族や友人が集う中秋節の楽しい気分が伝わってくるようですね。

卓上には、くわい、柿、菱の実、蓮根が置かれ、月餅のお重の中にはざくろ、バナナ、蓮の実が詰められています。

藍染めの布の一番目立つところには招貴人の象徴である鳳凰が羽を大きく広げている模様が見えます。

食卓の奥には紹興酒[女儿紅]が封を解かれるのを待っています。

もしかしたら、このお宅にはもうじきお嫁入りする娘さんがいるのかもしれない。

普段は古い水郷の町の風景を好んで描く作者、盛璞さんですが、この絵はお嬢さんへの想いをこめた特別なものなのでしょうか。そんなふうに想像すると、とたんに画の中の紅い色が一層鮮やかに目にとびこみます。

蓮根の両端近くにある藍染の模様、丸の中の菱形は、



「中秋の贈り物」 盛璞 金山農民画院

お金を意味するものです。

娘の新しい家庭にもお金がたくさん連(蓮)なって入ってきますように、と親心は結構現実的です。

農民画にはストーリーがあります。

皆さんも是非絵解きをしてみてくださいね。

松本杏花さんの俳句

「千里同風」より

天高し紺碧の湖さざ波す

tiānqióng chéng gāo yuǎn
天穹呈高远

yī hóng húshuǐ bì rú lán
一泓湖水碧如蓝

xì bō fàn liàngyàn
细波泛潋潋

季语：天高、秋。

赏析：这是诗人九月七日游览牡丹江镜泊湖时所作。秋高气爽、水天一色、文人墨客济济一堂、不抒发情怀才怪呢！那如玻璃般的天空和湖水、正是诗人们的担荡胸怀。

金秋や風鐸の音の風に舞う

jīn qiū duō cǎnlàn
金秋多灿烂

yán xià fēnglíng yīn qīng wǎn
檐下风铃音清婉

suí fēng wǔ piānpiān
随风舞翩翩

赏析：本首是参观金泊湖畔寺庙时所作。从大环境的秋色、到小巧的风铃、松本女士笔下的风物、皆如请婉的风铃萦绕在耳畔、回荡在天地之间。

有什样的心境、就能创作出什么样的诗作。通过此首俳句、我们可以窥见诗人淡泊名利的人生观。

〈句集の頒布について〉 松本杏花さんの俳句集、第二集の「余情残心」と今回発行の第三集「千里同風」は、価格、1000円で頒布できます。*お問い合わせ：☎048-885-2914（松本）

〒336-0931 さいたま市緑区原山2-40-18 松本杏花

【お詫び】10月号掲載の電話番号を上記に訂正します。

“要領を得ない”ということばを時々耳にします。例えば、最近のオーディオ機器やパソコン、携帯電話などは機能が大変多いためその解説書は厚くて、専門用語も多く読んでもなかなか理解できませんが、そんなとき「この説明書は、専門用語が分からないと説明が要領を得ないので閉口するよ」などと言ったりします。また、誰かに何か質問をして、それに対する答えがあいまいなときに、「彼の返事はどうも要領を得ないなあ」などとも使います。実は、私達が「要領を得ない」といって日常的に良く使う表現の出所は、下記に紹介するように中国の古典で、日本の辞書でも「不得要領(ふとくようりょう)」で掲載されているものなのです。

辞書では、

▲三省堂 現代国語辞典：

「不得要領 あいまいで、はっきりしないこと」

▲小学館 中日辞典：

「不得要領 bù dé yào lǐng 要点が分からない」

と載っています。

この成語の出自は〈史記・大宛列伝〉の「騫从月氏到大夏、竟不能得月氏要領」の部分です。

(騫は月氏から大夏まで行ったが、結局月氏の答は要領を得なかった。)

西漢の武帝が即位した頃(前180年頃)、西漢の北西部で勢力を伸ばしていた匈奴^{注1)}が月氏^{注2)}を打ち負かしました。その時匈奴の將軍が月氏の王の頭蓋骨をくり抜いて酒杯を作り、その器で酒を飲んだのです。そのため月氏の人々は匈奴を猛烈に憎み且つ恨みました。まさに恨み骨髓です。

西漢の武帝はこのことを聞いて、月氏国に使者を送り、月氏を説得して同盟を結び一緒に匈奴を滅ぼしてしまおうと考えました。

当時の漢、匈奴、月氏の勢力配置は漢と月氏の間匈奴が位置していたので、漢から月氏国まで行くには、どうしても途中の匈奴の勢力圏を通過する必要があったため、途中で捕まってしまう恐れがありました。その為そのようなリスクを負ってまでも使者を勤めようとする者はなかなかいませんでしたが、やっとう郎官(官位名)の張騫が「私がその役を引き受けましょう」と、これに応募してきました。武帝は張騫を月

氏国への使者に決めました。

張騫は100人ほどを従えて長安を出発し、月氏国に向かいました。しかし、匈奴圏を通過する時に案の定捕まってしまいました。そして、その後なんと十余年にわたって匈奴に拘留されることになったのです。

張騫は匈奴の地で妻も得、子供もできたのですが、彼は西漢の使者である証の符節(割り符)をずっと手放さずに持ち続け、使者の役目を全うすることを心に誓っていました。そしてその後、彼は機を伺って供の者たちと一緒にやっとう郎官の地から逃走することに成功しました。

一方、月氏国はすでに匈奴に敗れた時点で一部は甘肅と青海に”小月氏”として残り、他は北へ逃れ、国の名も”大月氏”と改めていました。しかし、大月氏は烏孫にも追われ更に西へ逃れました。

張騫が匈奴から逃走した頃には大月氏はすでに大夏(現在のアフガニスタン北部)の国を征服し、そこを本拠地とした国づくりが始まっていました。

匈奴の地から逃走後、張騫らは当初の月氏国(後の小月氏国)へ向かいましたが、月氏は既に二つに分裂し、北へ移動した月氏は、月氏月氏国が建国された方向を目指して、大宛国(現在のウズベキスタンの東方)や康居国(現在のカザフスタン領)等を経、転々としながらやっとう郎官の地に到達しました。の西方にあった大夏を征服し、その後大月氏国

私が調べた四字熟語 46
不得要領(ふとくようりょう) 三澤 統



イラスト：叶霖(yè lín)

という名称で建国していることを知りました。そこで張騫は大月氏国が建国された方向を目指して、大宛国(現在のウズベキスタンの東方)や康居国(現在のカザフスタン領)等を経、転々としながらやっと大月氏国に到達しました。

張騫は使者の役目を果たそうと、大月氏国の王に漢との同盟を説いたのですが、「確かに匈奴は憎いが、もう随分前のことであるし、今は人民の生活も安定している。今さら漢と同盟して匈奴と戦うというのはどういふものであろうか…」と言い、結局、月氏と西漢が協力して、匈奴を反撃しようという明確な返答を王から得ることができませんでした。

月氏が滅ぼした大夏の地は物産は豊富で、土地も肥沃であり、この地に建国した大月氏国の人民の生活は安定し平安で匈奴への復讐心はもはや過去の物だったのです。

張騫は、月氏と漢との盟約を取り付けるため、十余

年にわたって紀元前2世紀の中央アジアを延々と旅したわけですが、結局、両国が力を合わせて匈奴を滅ぼそうというはっきりした答えを月氏から得ることができなかったのです。

■注

1)匈奴(呉音:くぬ、漢音:きょうど、拼音:Xingnú)は、紀元前4世紀頃から5世紀にかけて中央ユーラシアに存在した遊牧民族および、それが中核になって興した遊牧国家(紀元前209年～93年)。モンゴル高原を中心とした中央ユーラシア東部に一大勢力を築いた。

2)月氏(呉音:がちし、漢音:げつし、拼音:Yuèzhī)は、紀元前3世紀から1世紀ごろにかけて東アジア、中央アジアに存在した遊牧民族とその国家名。紀元前2世紀に匈奴に敗れてからは中央アジアに移動し、大月氏と呼ばれるようになる。大月氏時代は東西交易で栄えた。

フリー百科事典「ウィキペディア」より

【わんりい活動報告】

〈手づくりで月餅を作ろう!〉

2010年9月9日(木) 13:00～15:00 於:まちだ中央公民館・料理室



今年の中秋節(9月22日)は、是非手づくりの月餅で祝いましょうと、9月9日「手づくり月餅の会」が開催されました。講師は、'わんりい'会員の有為楠君代さん。

昨年、月餅を手づくりしてみたいという'わんりい'の皆さんの声に応えて、何媛媛さんが月餅の型をわざわざ中国から取り寄せてご指導くださいました。以来、有為楠さんは、試行錯誤の努力を重ねられ、この度私達にその成果を教えてくださいることになったものです。参加者13名に加えて、何媛媛さんと'わんりい'中国語勉強会・講師の郁唯さんもいらっしゃいました。

まず、講師による月餅の皮の作り方、小豆餡、各種の木の実を混ぜ合わせたナッツ餡、ナツメ餡の作り方や月餅の木型を使っての成型のデモンストレーションの後、小豆餡担当、ナツメ餡担当そしてナッツ餡、それぞれ担当の班に分かれて実習に入りました。

できれば一晩くらいは寝かせたい月餅の皮の種、小豆餡、ナツメ餡は講師自ら前日用意くださり、月餅の木型も、この夏の中国旅行で手に入れてくださいました。

実際に作ってみると木型で成型する時、皮を均一にするのが思ったより難しく、木型を外してみると中の餡が出たり、底が分厚くなってしまっていたりです。また、

結構強く木型に押すようにしないと折角の木形の模様がくっきり出ないことも学びました。

しかし、こんがり濃い目の茶色でツヤツヤと焼きあがった月餅は、多少、形が悪くても三種類の餡それぞれにとっても美味しく、お持ち帰りもできて、参加の皆さんは大満足でした。型はゼリー型でも良いそうです。

毎年、中秋節の頃に「月餅の会」を開催して、ゆくゆくは'わんりい'ブランドと呼ばれるような月餅にしたいという話も出ています。来年は皆さんも一緒に作ってみませんか。

(報告:鈴木千佳子)



参加者、みんなで山分けした月餅

八仙人の中で、一番庶民に近い姿をしているのは藍采和といえるでしょう。

藍采和は、いつもぼろぼろの上着を纏い、破れた竹籠を持ち、片足は裸足、片足は靴を履き、男なのか、女なのか性別もはっきりしません。又、話によれば、藍采和の出身地は不明で、冬、薄着でいても寒そうに見えず、夏に綿入れを着ても汗をかかず、実に奇妙な人物です。彼は拍子木を叩き歌って街を歩き、人々から食べ物やお金を恵んでもらいながらあちこち行脚していました。

ある時は町の露天劇場で面白おかしい芝居を演じたりすることもありましたので、「藍采和」は芸名ではないとも言われています。街の人々から恵んで貰ったお金は貧しい人々に渡したり、或は財布を紐で繋いで引きずって歩き回ったりしてなくなることがあっても気に掛けず人々に拾われるのを待っているようでした。

お酒はめっぽう弱いくせに飲むのが好きで、酔えば踊りながら歌を歌いました。歌の内容は、時に深い意味を感じさせるものもあれば、誰にでも分かる平易なものも有り、また有る時は荒唐無稽で意味不明のものもありました。

藍采和はいつもそんな風でしたので、町の人々は面白がって彼の後ろについて廻りました。ところがある日のこと、藍采和がいつものようにお酒を飲んで酔ってしまったところ、突然、天から美しく妙なる音楽が響いてきました。その音色が藍采和の耳に届くと、藍采和はふと目を覚まし、やにわに靴を脱ぎ、ぼろぼろに破れた上着も脱ぎ捨て、手にしてい

た拍子木を打ち捨てて、ふわふわと空中へ舞い上がって行きました。

その後、「藍采和は仙人になった!」という噂話が町中に広がり、町で彼の姿を見かけることは滅多になくなりました。まだ小さな子どもの頃に藍采和を見たことがあるという老人が、街かどで藍采和を見かけたそうですが、その容貌は若々しく、昔のままで少しも変わっていなかったそうです。

藍采和についてはまた別の言い伝えもあります。実は、彼の祖父はお医者さんで、藍采和が十八歳になった頃から祖父の手伝いをするようになり、その内自然と医術が身に付いてきました。彼はしばしば薬草を採りに山へ出掛けましたが、お腹が空けば野生の果実を食べて空腹を満たし、喉が渴けば泉の水で渴きを癒しました。靈薬としてよく知られた靈芝や茯苓を口にすることもよく

あったそうです。

そのような或る日、汚い衣服を纏ったおじいさんが蓮池の傍で寝ているのを見掛けました。近づいてよく見ると、おじいさんのお腹には瘡ができて、膿を持っています。あまりに痛そうなので藍采和は見かねて、その膿を絞り、薬を塗ってあげました。と、なんとその傷から血が流れ始めました。どうしたことか事情が分からず呆然としていると、おじいさんは怒って「馬鹿者!早く水で流してくれ!」と藍采和を怒鳴りつけました。藍采和は慌てて背負っていた籠で池の水を汲みました。しかし、籠は水を溜めておける筈はありません。おじいさんの傍に着くまでに水は一滴も残らずすっかり漏れてしまってい



した。「泥で籠を塗って!」とおじいさんはまた怒鳴りつけ、藍采和は急いで泥を籠に塗り付け、水を汲んで来てみると、水は今度は泥水になってしまいました。

「泥水を治療に使えるもんか!綺麗な水を汲んで来い!」おじいさんの罵声はもっと高くなり、藍采和はすっかり途方に暮れてしまいました。と、その時、後ろに女性の笑い声が聞こえ、振り向くと美しい女性が後に立っていました。

「蓮の葉と泥、どっちが使いやすい?」女性が笑いながら尋ねました。それを聞いた藍采和は「はっ!」と気が付きました。急いで一枚の大きな蓮の葉を切り取ると籠の中に敷き、水を汲み入れて見ました。喜ばしいことに水は一滴も漏れずにおじいさんのところへ運ぶことができました。そして、その清らかな水をおじいさんの傷に静かにかけると、なんと傷は見る見るうちに消えてしまいました。

おじいさんは「ハ、ハ、ハ!」と大きな声で笑いながら元気に立ち上がり、「ああ、ご苦労さんだったねえ。泉の水の効力はたいしたもんだねえ。お前さんも飲んでみないか?」と言いました。目前の一連の出来事に茫然自失していた藍采和でしたが、おじいさんの勧めに従って手で水を掬って飲んでみました。と、忽ち、頭がすっきりとして、体も軽くなったようでした。

と、このとき、「あなたはもう仙人になったのよ!私達と一緒に蓬莱仙島へ遊びに行きましょうよ」と耳元でささやく声がしました。その途端、藍采和の手はおじいさんにしっかり握られて空高く舞い上がって行きました。

実をいえば、そのおじいさんとは鐘離漢(わんりい5月号/153号)で、女性は先月号で紹介の何仙姑です。二人は藍采和に仙人になれる素質があるとみて、仙界から彼を迎えに来たとのことでした。

アジアを読む(70)

歴史と視点 私の雑記帖

司馬遼太郎 著
新潮文庫

膨大な歴史小説を書いた人の「雑記帖」である。小説からこぼれたネタが、飲み屋の会話のようにざっくばらんに語られている。

中でも、作者の実体験に基づく「歴史的証言」が興味深い。戦時中、彼は戦車に乗っている。この「戦車」がかなりあやしい乗り物だったらしい。

まず、運転しづらい。動かすたびに、エンストする。さらに、装甲板ではなく、普通の鉄で作られており、ヤスリで削ると傷がついた。ヤスリで実際に削った、作者その人は「心の冷える感じをもった」という。ちなみに、「ただの鉄という戦車」は、昭和の陸軍が持っていた以外に、世界でまったく例がないそうで。ヤスリで傷ついちゃう戦車。存在自体がありえない。

「心の冷える」エピソードをもう一つ。作者は北関東の連隊にいた。使命は、敵が相模湾か東京湾に上陸したら、この使えない戦車で道路を南下して撃退すること。その作戦のために、大本営から人が来た。作者は素朴に質問する。敵が上陸したら、南下するはずの道路は、逃げ惑う人々で溢れる。大八車に家財道具を積んで北上し

てくる人々が溢れる道路で、どうやって戦車は南下するのでしょうか、と。



作者曰く、太平洋戦争は「官僚秩序が硬直しきったころ」に起きた。フリーズした官僚秩序にいたであろう、その問われた人は、言葉を失った後、「轢っ殺してゆけ」と、いったそうである。

アメリカの戦車にはとうてい勝てない戦車は、大八車には勝てるだろう。「しかしその大八車を守るために軍隊があり、戦争もしているというはずのものが、戦争遂行という至上目的もしくは至高思想が前面に出てくると、むしろ日本人を殺すということが論理的に正しくなるのである」と作者は語る。

読者は、あれだけの莫大な被害を引き起こした戦争は、負けるべくして負けたのだと実感として悟る。あの十五年戦争は、日本は地理的に対外戦争などできる国ではなかったという「小学生なみの地理的常識を再確認しただけ」という著者の言葉に、心が冷えた。

(真中智子)

中秋節を過ぎると、陝北はめっきり秋の装いに変わります。乾ききった黄色い土埃の舞う村々には、一年に一度の雨季が訪れます。稗もたわわに実り始め、あとは秋雨に耐えて赤く色づくのを待つばかり。雨降りの午後、女性たちは家にこもり、オンドルの上に腰を落ち着けて、布靴づくりなどの針仕事に精を出します。私が調査している剪紙(切り紙)も、涼しくなったこの時期、刺繍やパッチワークの型紙としてちよくちよく作られます。短い秋が終わり、正月準備が始まれば、本格的な剪紙シーズンの到来です。そこで今回は一足先に、陝北の剪紙の世界へご案内しましょう。

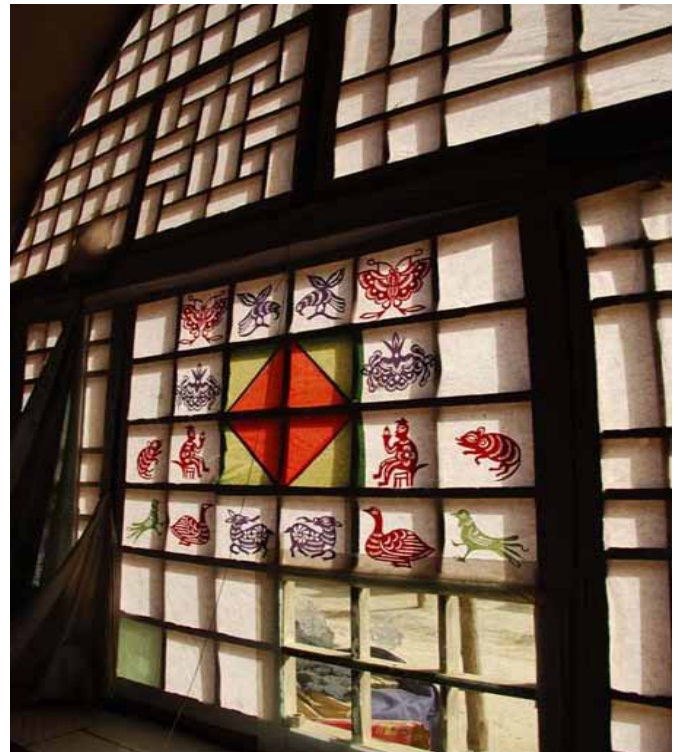
ヤオトン 窯洞を彩る窓花

大地に深く刻み込まれた皺のように、迫立つ山谷が無数に走る黄土高原。人々はこの自然環境を生かして、太古の昔から山肌に掘り込んだ横穴式の住居を棲み家としてきました。陝北で剪紙といえば、第一にこの窯洞チュアンホワと呼ばれる伝統住居の、窓の障子紙に貼られる切り紙細工「窓花」を指します。大地に包み込まれたドーム状の窯洞空間に足を踏み入れると、本当の窓花の姿に出会えます。構造上、窯洞の唯一の採光部は入口面に配された格子窓。窓からひとたび太陽が差し込むと、薄暗い家の中に、窓花が赤みを帯びた光の影を落とします。その光景はまさに、ステンドグラスや影絵のような幻想的な美しさ。

陝北農村では「窓花を貼らないと子供の目が見えなくなる」と言われ、特に子をもつ家には必ず窓花を貼る風習があります。これは、外光を採り込む窓が窯洞の眼とされ、窓花を目に映るもの(こと)になぞらえてのこと。この他、「窓花ティエンホワは“天花”(天然痘)をとり去る」という言い伝えにも、視覚的、聴覚的なイメージの重ね合わせが見てとれます。

今でこそ、「民間芸術作品」として販売・流通されている剪紙ですが、陝北での用途は本来、春節やハレの日に殺風景な窯洞に彩りを与える装飾品です。剪紙は農閑期の女性たちの家事を兼ねた楽しみで、材料には春聯と兼用の「紅紙」が使われます。春節前に家々の大掃除が済んで、シャンと整えられた窯洞の内外に剪紙や春聯が貼られると、気分は一新! 冬枯れて黄色い大地一色となっていた村の景色は赤い絵の具が飛び散ったように、にわかには華やぎを取り戻します。剪紙の様々な図案や、紅紙の鮮やかな赤色は、吉祥祈願や魔よけの意味をもつとされ、特に窓花には来る年の干支や祈願にちなんだモチーフが選ばれます。

ところがこの剪紙、障子紙や台紙に一度貼ると剥がせず、強い黄土高原の陽光や風に晒されるとすぐに色褪せ、



剪紙が貼られたヤオトンの窓の障子はまるでステンドグラスだ

破れて朽ちゆく運命にあります。このため年越し準備の障子の張り替えに乗じて一年ごとに貼り替えられるのですが、実際ここに暮らしてみると、その脆さ、儚さがむしろ、一年ごとに貼り替えられて、新しいかたちとして再生する契機を生むのだと感ずるようになりました。“使い捨て”であることが、剪紙がこの地に永くあり続けることの鍵なのではないか——それはきっと、剪紙それ自体がモノや作品として価値があるからではなく、使われては消え、何度も生まれ変わること、その存在を忘れかけていた人々に思い起こさせ、“生きる”ことができるからだろうと思うのです。

剪紙の“使い方”

陝北人は古くから、紙に切り出されたかたちの力を信じ、祈りや願いを伝えるメディアとして活用してきました。例えば、結婚式をかざる剪紙シイホワ「喜花」はその代表格。式の当日は新居の外の窓や、寝床の壁、嫁入り道具、新郎新婦の契りの儀式で食される花饅頭等にべたべたと貼られ、窯洞の内外が男女の結び合いや多産を隠喩する多くの吉祥図案で埋め尽くされます。

写真の丸い剪紙は直径80センチくらいのビッグサイズで、新郎新婦の寝室の壁を飾る喜花の花形です。剪紙の種類としては「大団花」と呼ばれ、1枚の大きな「紅紙」を8

つに折り畳んで鋏を入れていく手法がつかわれています。

切り出された図案には、左右対称の4つの絵柄がぐるっと中心を囲むように並びます。このやり方は制作を簡略化できる一方、(通常的手法だと4～8枚ほど紙を重ねて切るため複製できるのに対して)1度に1枚しか切れない、つまり1点モノになるのが特徴です。そこで、この剪紙を新郎のご両親から依頼された劉小娟さんは、新郎新婦へのメッセージを込めて、世界にひとつだけの図案を切ってあげたと言います。

外縁の下の、角がある横を向いた動物は牛で、牛と向かい合う小さな動物は犬です。実は新婦の干支が牛で、新郎は戌年。小さな犬が大きな牛に巻かれているこの図案には、「結婚後、だんなさんが奥さんの尻にうまく敷かれて夫婦円満になるように」という、剪り手の劉さんの同姓びいきの願いが込められています。囍(双喜)の上の大きな花は、「石榴坐牡丹」と呼ばれ、牡丹が女を、石榴が男や多産を象徴します。男女結合・子孫繁栄を表す代表的な図案です。

牛の顔の下に潜り込んでいるのは魚で、中央に円状に並べられた栗のような形は蓮のつぼみ。この二つが合わさると「魚戯蓮」と言って、これまた男女結合の隠喩が込められます。「昔は十三、四歳でもお嫁に行ったからね。魚は男で蓮花は女。口で言わずとも、^{ホワ}“花”を見りゃ子供だってやるべき

ことがわかるっていうわけさ」結婚式に参列したおばあさんたちは、そうカラカラと笑いながら、話してくれました。

こんな風に、陝北の剪紙のかたちには、絵解きのような面白さが詰まっています。おまけにその象徴的意味は、かたちに表されるだけでなく、儀式の中の唱え言葉や、会話中の常套句などと一緒になることで喚起されて、強いメッセージを放ちます。例えば、陝北の婚姻の中心儀礼「上頭」では、介添え人が集まった人々の面前で、背中合わせに座った新郎新婦の髪を櫛で交互に梳きながら、次のような唱え文句をリズムよく大声で投げかけます。「……娘産んだら器用に育て、石榴も牡丹も冒鉸できる……揃いの

胡桃、揃いの棗、男女の子供が揃いでオンドルを駆けっこ……」。その後、新郎新婦は、頭上から落とされた12対の胡桃と棗を大急ぎで拾い集めるのですが、胡桃と棗もまた、その形状や色から男女を暗示します。

また、中国語お得意の「諧音」(漢字の発音が同じか近い)によるかたちと複数の意味の重ね合いも多用されます。例えば、「^{mǎshàng fēng hóu}馬上封猴」は馬に乗った猿の絵柄で、立身出世を表し、子どもがいる家に貼ってあるのをよく見かけます。「馬上」は「馬の上」と「すぐに」という意の語呂合わせで、「^{hóu}侯」と「^{hóu}猴(猿)」が同音になっています。しゃれが効いた、わたしも大好きな図柄です。

陝北の剪紙はこのように、かたちと言葉が何層にも響き合うことでイメージを喚起する、絶妙な仕組みの中に組み込まれています。かつての陝北では子どもの死亡率が高く、特に子沢山とその無事な成長、そして将来の幸福はすべての人々の切実な願いでした。そのメッセージを繰り返し思い起こし、皆で共有することはとても大切な剪紙の役目だった考えられます。

その他、民間療法的な儀式の中で、祈祷師や病人の親族が黄色い紙で^{ひとがた}人形を切ってそこに病や厄を移して燃やし、抜けてしまった患者の魂を呼び戻す^{ひとがた}など、特に人形の切り紙には不思議な力が宿るとされます。晴天を祈り、空を巡って雨雲を掃く女の子の姿をかたどった「掃天婆婆」(てるてる坊主)も切り紙です。秋雨が多い今の時期、

家々の庭先につりさげられます。また、ギシギシと鳴る木戸の音が気になる時には、紙を子どもの形に切って戸にぺたっと貼ると、音がピタッと止むと言います。これらの剪紙に切り出されたかたちは、人の思いや願いを具現化し、人々や神に伝える手紙のようなものなのかもしれません。

即興的に、剪紙をつくる

この地の方言では切り紙することを「^{ジャオホワ}鉸花」と言い、字義通りには「美しいかたちを鋏で切る」ことを表します。ところが不可解なことに、自らが切った窓花を貼っているにも^{ジャオホワ}かかわらず、女性たちの多くが「自分は鉸花できない」



大団花を剪る



剪って広げられた大団花

と語るのです。先ほど紹介した「娘産むなら……石榴も牡丹も冒鋏できる」という結婚儀礼の唱え文句に登場した「冒鋏」とは、直訳すれば「出し抜ける」という意味。これは手本や下絵なしに直接紙に鋏を入れて自在にかたち

を切り出す技術とされ、特に女性たちは、これと既存の絵柄を複製する作業（「替様子」とをはっきり区別していません。冒鋏できる名人は、想像力を発揮して思い描いたイメージを意のままに直接かたちにあらわせる、新たな図案の創作者とみなされます。これが出来てはじめて、胸を張って「鋏花できる」と言えるのです。

ところが実際のところ、^{マオジャオ}冒鋏と^{テイヤンズ}替様子^{テイヤンズ}の境目はかなり曖昧です。替様子の場合、重ねた数枚の紅紙の一番上に型紙となる剪紙をのせて、上から針を指して穴を開け、紙縫りを通して全部を動かさないように固定してから、鋏を入れて複製していきます。もう少し上級者になると、既存の剪紙を手本に、見よう見まねで切る人もいます。いずれにしても、正確に元の手本を写し取るというよりも、むしろ切り手が自分なりにどうアレンジを加えるかによって、器用さや「創意」の有無が量られます。

もちろん子供やぶきっちょさんが切ると、いびつだったり、装飾が省略されたりするわけですが、剪り手たちはそんなことはお構いなしに、手本の剪紙と剪り上がった自作の剪紙と混ぜて貼ってしまうから驚きです。当然、下手な自作の方が残って次の型紙となる場合も多く、「オリジナルの剪紙を手本として大切に保管し続ける」という、それまでの私の常識は脆くも崩れ去りました。

このような剪紙のあり方は、この地の歌や詩が生まれる過程にも通じます。かつて識字率が極めて低かった頃、農村社会には文字を介さない豊かな音とかたちの世界が広がっていました。今でも陝北では、臨機応変に秧歌の歌詞を編んだり、酒の席でその時感じた喜びや感動の気持ちを対歌として唄い合う光景を目にします。

厳しい自然相手の農村生活。ここで共有された文化から詩的イメージを引き出し、即興で歌や剪紙として落とし込むことができる名人たちは、皆の羨望や尊敬を集める

存在です。もちろん、紙や音である以上、「もの」としてはやがて消えてゆきます。しかし彼らが生み出した言葉や私たちは、次々と他の村人によって模倣やアレンジされ、ときに世代を超えて伝えられていくのです。



「馬上封侯」



「掃天婆婆」(てるてる坊主)

多く切って残った剪紙、気に入った型紙としてとってある剪紙は通常、古雑誌や使い終わった子どもの教科書などの間に挟まれて、オンドルと敷布団の下や、収納箱のなかに保管されます。家を訪ねて「^{ヤンヤン}“様様”（型紙）みせて！」と頼むと、女性たちは大切そうに取り出してきて、オンドルの上に並べてくれます。中には「この村にお嫁にきた20年前、実家から母の^{ヤンヤン}“様様”を持ってきた」という年代物の型紙があったり、姑が最期に「何も残してやれないけど、これが私のすべてだ」と言ってかわいがっていた嫁にたくさんの剪紙を託した、といった話を聞くこともあります。

しかし、そのような古いと言われる剪紙でも、色褪せたりボロボロになっているものを私は見たことがありません。おそらく、私の目の前の剪紙は、好きだから、大切だからこそ、何度も繰り返し写され、模倣されたもの。当初の面影を残すくらいで、ずいぶんかたちに変化したのもあるかもしれません。

次の春節にも、女性たちが村の家の窓花を見て回り、お気に入りをもって型紙にする光景が見られることでしょう。こうやってひとつの

たちが、次の変奏を生むイメージの源泉となる……剪紙はこうして生きてきたし、これからも必要とされるかぎり生き続けていくと、私は信じています。

★丹羽朋子(にわともこ)

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。

一芯社ウェブサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)から、本エッセーのバックナンバーもダウンロード可能になりました。

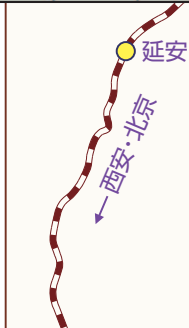
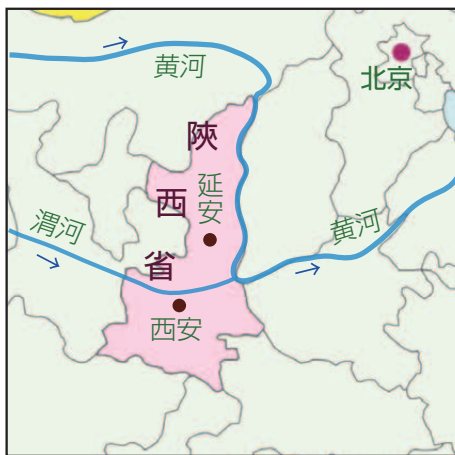
◆ 憧れの黄土高原

中国の地図で、黄河が北へ流れて、東に向きを変え更に南下する地形が不思議でならなかった。其の地がオルドス高原と呼ばれると知って、オルドスという名前にロマンを感じた。オルドス高原とは、この黄河湾曲部内の、南は万里の長城に至る砂漠の大地だ。

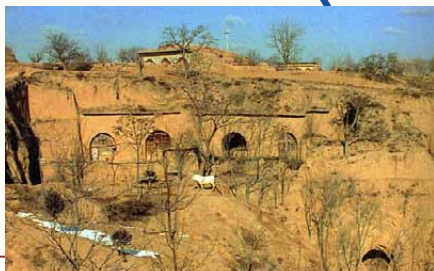
そのオルドス高原から万里の長城を越えて南に広がる黄土高原。何百万年にわたり中国北西部の砂漠地帯から風に巻き上げられた黄土の細かい砂塵が降り積もり堆積し、果てしなく広がる黄土の大地になった。以前、オルドス高原のほんの一角を訪れたので、次は黄土高原地帯に是非行ってみたいと長年思っていた。

一般に、黄土高原を紹介する写真の多くは、一面土色の雄大で厳しい大地を写したものの、或いは薄っすらと雪を被って美しい模様を見せる谷間の景色等々で、其の地での人々の生活の気配をまるで感じないのだ。果たして人はここで生活しているのだろうか。ところが歴史地図を見ると、この地域には多くの国が興きては亡び、併合と分裂を繰り返していたようだ。大分後になって、この地が現在のようになり始めたのは1000年位まえからで、その昔は豊かな緑に覆われた土地だったのだと知った。そうなる

と、現在この地ではどんな生活が営まれ



ヤオトン 撮影：周路



ているのか知りたくなってくる。

そんな折、わりいりに縁の深い周路さんから、通称“陝北地方”と呼ばれる陝西省の黄土高原地帯を案内しても良いとの連絡を頂いた。周路さんは、日本留学中に、わりいと深い繋がりが出来た版画家・写真家で、現在は現在は安徽省安徽财经大学・文学与芸術传媒学院で教授として教鞭をとっているが、黄土高原に魅せられて、一時期、延川県の文化局副局長を務めたこともある。以前から、黄土高原を案内して欲しいとお願いしてあったのが、「学校の休み中ならば」とのご返事を頂いたので、旅の計画がスタートした。

丁度其の頃、「わりいり」誌上に、この地域の人々の生活と民間芸術を研究しておられる丹羽朋子さんが、研究の一端をご紹介くださることになり、ビデオの上映会も開催して下さったので、思いがけず、旅の事前学習が出来たのだった。私はそこで初めて人間臭のする黄土高原を見せていただき、黄土高原への旅がますます楽しみになってきた。

◆ 延安まで

周路さんからは「延安」で待っているからとの連絡が入ったので、日本から延安までの便を調べたが、直行便は無く、北京—延安は早朝に1便あるだけでかなり混んでいるとのことだった。どうせ1泊するのなら、列車の車中泊にしよう、旅行参加メンバー・御代川さんの友人に頼んで切符を手配して頂いた。延安は、毛沢東の長征の終点として有名で、北京から列車での所要時間は、約16時間、北京を21:30に出発すると、翌日13:30には延安に着けるはずだった。ところが数日前に降った雨で線路が崩れ、列車は西安で運転打ち切り、西安からはバスで延安まで行かなければならなくなった。

西安からの高速バスが延安に到着したのは、午後6時半を過ぎていた。実に5時間の遅刻だ。携帯電話で知らせてあるとは言え、きっと待ちくたびれているだろうとバスを降りた。長い間待たせたので、周路さんが我々を直ぐに見つけてくれるだろうと期待していたのに、誰も近寄ってこない。心配しながら待つこと10分、やっと現れた周路さんは、我々の荷物を見てちょっと慌てたようだった。

メールによる事前の連絡で、「荷物は少ない方が良い」とは言われていたが、前後2週間の旅ともなると、それなりの荷物になり、4人のうち1人は、背負い始めに苦労するほど大きなリュックサック、後の3人は、中ぐらいのスーツケースに、小さめのデイバッグといういでたちだった。

挨拶が終わって、車に乗り込んだ時、周路さんが慌てた原因が分かった。用意してくれた車は日産の7人乗りだったが、座席の後の物入れが小さくて、我々の荷物を全部は乗せ切れなかった。荷物の半分を後ろの座席に乗せて、後部座席の2人は荷物との3人掛けで出発することになった。荷物を真ん中にして、振り分けられた2人はすっぽりと収まって、乗り心地は悪くなかったが、周路さんの説明では、地域の案内をその土地に詳しい友人にお願いする予定で、1人か2人余分に乗ることもあるので、このままの状態では旅は続けられないとのことだった。窮余の一策として、ヤオトンへ泊まりに行く時は1泊に必要な荷物だけを持ち、残りの荷物は街中のホテルで預かってもらうことにした。

荷物に関する方針が決まったところで、周路さんに、「夕食と、宿を延川に用意してあるので、これから更に小一時間走らなければならないが、大丈夫か?」と言われた。大丈夫ではないけれど行くしかない我々は、「お腹がすいて死にそう!」と訴えた。我々が食事をしたのは、前日の夕方、北京で列車に乗る前、6時頃で、それからは殆ど何も食べていなかった。「朝食は、列車の食堂車で、外の景色を見ながらゆっくり」と目論んでいたのに、其の時間には西安で降ろされて、延安行きのバスを捜すのに大奮。朝食どころではなかった。バスの座席を確保したのが昼頃。「後20分でお出発」と言われて、そのまま座って待っていた。

バスはなかなか出発しないので、外を見ると、我々のバスの運転手さんが、仲間の2、3人とバスの陰で昼食を摂っているのが見えた。運転手さんは、かなりの量を食べ終えて、お茶を飲んでから、やおらバスに乗り込んでいよいよ出発となった。その時は1時を少々過ぎていた。バスが走り出して直ぐ、我々は昼食も摂り損ねたことに気付いたが、後の祭り。手元にあるのはアメやガムの類だけでどうすることも出来ず、延安まで空腹を抱えて来てしまったのだ。

周路さんが調達してくださったパンと水で、4人はやっと人心地が付き、車の外を眺めるゆとりが出来た。延安から北西の方向に進み、初めは河に沿って走っていたのが、暫く行くと河から離れ、再び違う河沿いの路になった頃、延川県に到着した。中国の行政区画では、県は市より小さいのだが、延川は二つの川が合流した所であって、雰

囲気が伸びやかな街だった。川は二つとも黄河の支流のようだが、名前は分からなかった。其の夜は、延川大賓館に泊まったが、何しろ、久し振りに食事とベッドにありついたので、感想は何も無く、直ちに寝入ってしまった。

◆ 小程村のヤオトン

翌日は早速、旅の目的の一つであるヤオトンでの宿泊のため、スーツケースの中からヤオトンでの1泊に必要な荷物——着替えの他に、シャワーやトイレへ行く時のためのツッカケ、シャワーで水を溜め、被るための小さなプラスチックの桶等——を取り出し、ホテルを出発した。

ヤオトンは、日本の中学・高校の教科書でも紹介されることが多い、この地域の地形と地質の特色に併せて、昔から利用されてきた住居である。この地に多い、垂直に近い崖面に、横穴を掘り住居とするもので、当然側面に窓がない。唯一の明り取りの正面に、今はガラスが嵌められているが、昔は紙を張った戸をたて、そこに飾りとして貼って楽しんだものが、剪紙の技術として発達し、現在この地方の特産品となっているとの話はよく聞く。ヤオトンは、冬暖かく、夏涼しいと聞いているので、是非泊まって見たいと思っていた。

此処から、周路さんの友人の杜さんが案内役として同行してくれることになった。杜さんは、延川で剪紙を額や掛け軸・巻物等の製品に仕立てて販売をしているとのことで、ホテル近くの事務所に寄って、様々な作品を見せていただいた。その後、11時頃になってから、街並みに沿って流れている河を渡って、いよいよ小程村に向けて出発した。

小程村のヤオトン宿泊施設に到着したのは昼下がり、街を出て1時間程後だった。途中で一度車を降りて、畑の遥か先にある河が黄河で、夕方散歩しようと言われたので、延川から東に来たのは間違いないのだが、今、陝西省の地図をみても、小程村の名前を見つけることは出来ない。

我々の部屋としてあてがわれたヤオトンは、崖に掘られた部屋と棟続きではあるが、背面だけが崖にくっ付いている部屋だった。それでも中は涼しくて快適だった。入り口を入ると、右手にオンドルのようなスペースが続き、奥にはシャワーの設備と小さな洗面台があって、水とお湯は、特に時間制限も無く使用出来るようだった。此処には、「小程 民間芸術村」と彫った石碑があり、行政が一枚噛んで、観光客を誘致しようとしている施設のような。因みに、入り口は木の扉、部屋の戸締りは、中にいる時は門、外出する時はフックに鎖をぐるぐる巻きつけて閉めるものだった。

昼食を頂いて、部屋で昼寝をして、4時過ぎに散歩に出

かけることになった。考えてみれば、26日の朝、東京の家を出てから、乗り物を乗り継ぎ、慌しく前へ前へと進んで来たので、何もせずのんびり過ごせるひとときは、ゆとりにどっぷりと浸かって、「これぞ至福の時」と思える貴重な時間だった。

◆ 地質博物館・乾坤湾

4時とは言っても、まだかなり強い日差しの中、散歩に出かける。我々が車で来た道を少し下ると、ヤオトンへ行くために曲がった三叉路に出た。そこには前庭の広い大きな建物があり、「陝西延川黄河蛇曲地質博物館」と書いてあったが、門扉には鍵がかかっていた。其の前では、十人以上の人々が、屯して何か工事資材をまっているようだったが、其の中に周路さん、杜さんの知人がいるらしく、タバコを分け合って暫く話していると、やがて、一人の人が鍵の束をもってやって来て、後の建物の門扉を開けてくれた。

何と、我々のために閉まっていた博物館を開けてくれたのだ。展示物は、この地域のジオラマがあったり、出土した化石から昔の生物を再現したりとなかなか面白いものだったが、見学者が我々7人(周路さん・杜さん・運転手の楊さんと我々4人)だけと言うのが一番印象的だった。どうして閉まっていたのか、どういうときに開けるのか等一切不明だったが、顔見知りが出て、ちょっと話をすると、閉館中の博物館が見学できるのは、いかにも中国的で面白かった。

博物館を出て暫く行くと、道は左へ大きくカーブして下っていくが、我々が歩いて来た道端の地面はそこで無くなって、眼の下遥かに黄河のうねっているが見えてきた。展望台から石段がかなり下まで下っているが、黄河はまだまだ下の方を悠然と流れている。この辺りは、乾坤湾と言って、黄河が大きく湾曲して、スケールの大きな景色が見られると、丹羽さんから伺って、周路さんに特別にお願いし



黄河が大きく湾曲している乾坤湾の風景

て案内して頂いたものだが、本当に、お話し素晴らしいところだ。

ところが、この乾坤湾、どうした訳か、余り宣伝していないようだ。周路さんにリクエストはしたが、どの辺りか知りたいと思い、地図を広げてみたが見つけれなかった。日本の旅行案内書には、陝北(延安を中心とした陝西省北部)地域自体の案内が少ないので仕方がないとしても、北京で買った、中国人向けの個人旅行案内《中国自助遊》のような本にも名前すら紹介されていないのが不思議だった。この地名には、延川のホテルで初めてお目にかかり、今やっと其の地に立てたので、感激も一入のものがある。

夕刻とは言え、まだまだ強い日差しの中の乾坤湾は、力強く光を跳ね返して、大地の雄大さを誇示していたが、小一時間眺めている間に太陽の光が弱まってくると、風景にも微妙な変化が現れて、何かしら幽玄の気配が感じられるようになって来た。もっと時間が経過したら、どんな変化が現れるのか眺めていたい気がしたが、疲労も抜け切っていないし、夕食は気になるので、帰途についたのだった。

此処を下れば我々の宿に着くと言う坂道を通り越して、ほんの少し歩くと、宿から谷の向こう側に見えていた大きな建物に着いた。それは、開業準備に忙しいホテルだった。北京の胡同再建などに使われる、灰色のレンガを使ったヤオトンのようだが、2階建てで立派なレストランもある。何よりもびっくりしたのは建物の輪郭にネオン管が取り付けられていたことだ。

夕食後、食堂(我々の部屋と鍵の手に続いているヤオトン)から部屋に戻る時、すっかり暗くなった谷の向こう側に、先刻見てきたホテルの輪郭が赤と青のネオンでくっきりと浮き上がっていた。はるばるやって来た折角の黄土高原なのに、非常に場違いなものを見せられた気がして、ちょっとがっかりした。

[写真提供：渡辺栄子]

(次号に続く)



陝西延川黄河蛇曲地質博物館

ポロンナルワ

今回は世界遺産シリーズを休ませていただき、世界大学野球選手権に参加したスリランカチームの話をしていただきました。今回は世界遺産シリーズに戻って、7月号でお約束したポロンナルワを紹介します。

ハバラナからポロンナルワまでは国道11号線をバスで東に約45km、寄り道をしなければ約2時間ほどの旅になります。この辺りまで来るとポロンナルワ駅に停車する列車は1日に1本しか無い上に、駅自体が町の中心部から4kmも離れています。駅とバスターミナルを中心に繁華街になっていますが利用者が少ない為に三輪タクシーも待っていません。鉄道好きな方も、遺跡を見物するためにはハバラナからバスを使って遺跡の傍で降りたほうが無難でしょう。

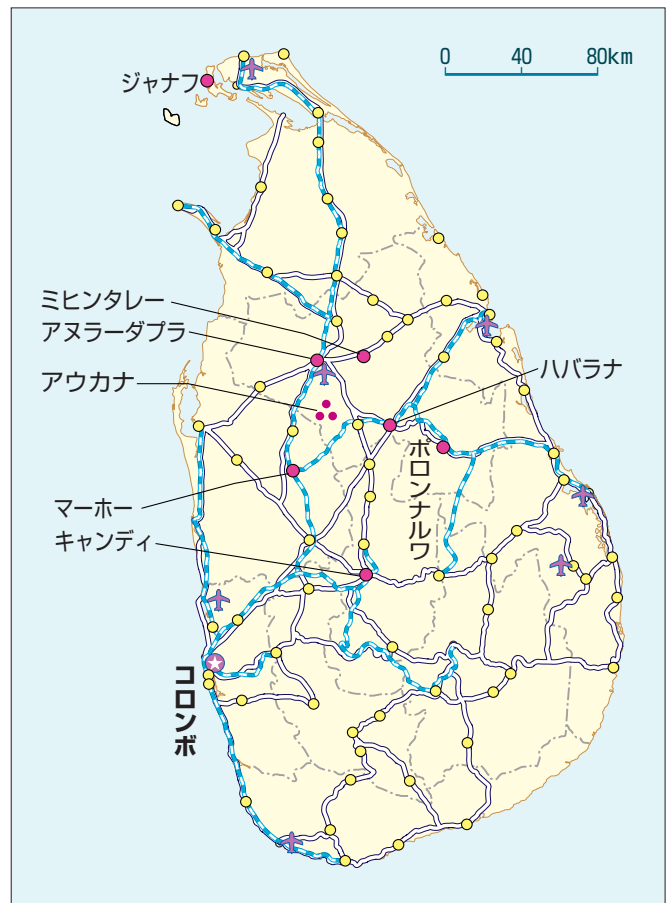
ポロンナルワの歴史について簡単に説明しておきます。ポロンナルワには11～13世紀にかけてシンハラ王朝の都がありました。10世紀末に南インドからの侵攻によってアヌラーダプラは征服され、シンハラ王朝はポロンナルワに逃れて11世紀後半に新しい都を興します。

ポロンナルワでも他の都と同様に宮殿等の建設に続いて、広大な貯水池と水路を含んだ灌漑施設の建設を行いました。貯水池は当時の王の名をとってバラークラマ・サムドラと呼ばれています。現在でもこの灌漑システムは当時のままに使われ、ポロンナルワ周辺の農地を潤しています。

水路では都のあった頃と同じく水浴をする人達の姿が見られます。ポロンナルワには多くの寺院が建設され仏教都市として栄え、ビルマ(現ミャンマー)やタイ等の外国からも僧侶が訪問していたと言われています。ところが、13世紀後半には再び南インドからの侵攻によってスリランカ島の中央部へと逃避行を繰り返す事になります。

ポロンナルワは僅か200年ほどの運命でしたが、この間に他の都に比べて寺院だけでなく数多くの仏像や建造物を残しています。レンタル自転車で主な遺跡を回るだけでも丸一日かかります。ガイド付きのタクシーを使っても少なくとも3～4時間は掛かるでしょう。ここで全てを紹介する事は難しいので代表的な物を紹介します。興味を持たれた方は図書館などで調べいただくようお願いいたします。因みに、町田の市立図書館に設置されている検索システムを使って、スリランカをキーワードにして検索すると50件以上ヒットします。

まず、**写真1**は貯水池の名前の由来となったバラークラマ・バーフ1世の宮殿跡です。建設当時は7階建てで1階には謁見の間と大広間等があり、全体で部屋数は50室以上をあったと伝えられています。現在は厚さ3mの煉瓦



造りの壁が3階部分までしか残されていませんが当時の建設技術の高さを物語っています。

写真2は、かつては聖なる菩提樹がこの遺跡の隣りに植えられていたというラター・マンダパヤ(菩提樹堂)。8本の石柱がそれぞれ蓮の茎の形をし、風にそよぐ茎を表し、頭頂部は蓮の花の蕾の形を表しています。

写真3はラトナギリ・ワターゲ仏塔。円形をしたポロンナルワで一番大きな仏塔で、中心にある御本尊の仏像はアヌラーダプラから遷都される以前の7世紀に建立されたと言われています。仏像手前、階段下段の左右にある石像はガードストーンと呼ばれ、今でも悪魔の侵入を防いで御本尊を守り続けています。

写真4はガル・ヴィハーラと呼ばれる仏像群。大きな一枚岩を彫って作った仏像です。左側の立像は高さ約7mあり仏陀の一番弟子のアーナンダが涅槃に旅立つ師の傍らで悲しんでいる姿と言われています。右側が涅槃像で全長は14mあります。写真には写っていませんが、涅槃像の右奥には高さ4.6mの座仏像があります。

写真5はバラークラマ・バーフ1世の立像と言われています。不思議な事にこの石像は他の遺跡群とは離れた場所に一体だけ建てられています。高さは約2mです。

以上が代表的な遺跡です。前述したようにポロンナル

ワにはまだまだ多くの遺跡がありますので、やはり現地に行かれて直接見るのが一番ですよ。

ポロンナルワからキャンディまでの国道沿いは木彫り彫刻で有名です。驚いた事にスリランカで彫られた彫刻が日本でも活躍している事をご存知でしょうか。何かと言うと寺院や一般日本家屋の欄間を飾っている花や動物の彫刻の一部はスリランカで彫られています。僕も知りませんでしたが、何とはなしに立ち寄ったお土産物屋で冷やかしていると、店主と思われる男が近づいてきました。「日本人か?」と訊いて来ます。そうだと答えると、裏にある作

業場の様な場所に連れて行かれ、長方形の枠に嵌められた木彫りを見せてくれました。そして棚から長い巻紙を取り出して広げて見せてくれると、何とそこには彫刻の絵柄や寸法と一緒に漢字である寺院の名前が書かれているではありませんか。この巻紙は目の前にある彫刻、すなわち欄間飾りの設計図だったのです。話を聞いてみると、この店だけでも年間に数十件の欄間飾りを彫っているそうです。スリランカ人の取り纏め役がいるらしく、この人物が設計図を持って来るそうです。スリランカ人は手先が器用なのでこの仕事に向いているのでしょう。面白い商売を思いつくものですね、感心してしまいます。読者の方の家の欄間飾りやご近所のお寺さんの欄間飾りがスリランカ製だったら楽しいですね。

次回はダンブーラの石窟寺院を紹介します。



写真1 貯水池の名前の由来となったバラークラマ・バーフ1世の宮殿跡



写真2 かつては聖なる菩提樹がこの遺跡の隣りに植えられていたというラター・マンダパヤ(菩提樹堂)。



写真3 ラトナギリ・ウォーターゲ仏塔。円形をしたポロンナルワで一番大きな仏塔



写真4 ガル・ヴィハーラと呼ばれる仏像群。大きな一枚岩を彫って作った仏像。



写真5 バラークラマ・バーフ1世の立像と言われる。遺跡群とは離れた場所に一体だけ建てられている。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

既に夕闇があたりを包み始めていた。温泉宿の女将に導かれ、一棟ずつに分かれた個室温泉の一部屋に入ると、簡単な脱衣場の向こうには裸電球のオレンジ色の光に照らされて、湯船いっぱい温泉が注がれお風呂が湯気をあげていた。

あああああ〜〜、これを待ってたの〜〜!!

亜丁での1週間、連日の登山で汗をかき、廃屋で眠り、雨に降られ、泥だらけになって過ごしていた毎日。高所では湿度が低く、それらもさほどは気にならないとはいえ、やっぱりお風呂は日本人の心の故郷だ〜。服を脱ぐのももどかしく湯船に身体を沈めると、後は言葉にならない幸せ……。好きなだけお湯に浸かったり身体を洗ったりした後は、かけ流し状態で湯船に注いでいる温泉と沢の水、2本のパイプの蛇口を捻ってお湯の温度をぬるめにする、忘れずにザックから取り出して持ってきていた文庫本を読み始めた。

天井から一つぶら下がっているだけの裸電球に照らされて、オレンジ色に染まったお風呂に浸かり、サラサラと溢れては流れ出てゆくお湯の水音を聞きながらゆっくり読書する、至福のひとつ……。たっぷり2時間かけて温泉からあがり、宿の縁側に座って夕涼みしていると約束通りシャムウの友人である青年の運転するタクシーが私を迎えに来てくれた。先ほど彼に渡されていた、例によって稲城中のタクシードライバーが使っていると見られる、個性のない名刺には『李陸海(リ・ルー・ハイ)』と彼の名前が記されていた。

お茶を飲んでいかないかと誘ってくれる女将に、運転手が待っているからと丁重に断って浮世辺絶温泉を出た。本当にここは素晴らしい温泉宿だ。今度稲城に来る時も、また絶対立ち寄ろう……



車に乗り込むとお腹がペコペコだった。考えてみれば、朝の出発前に亜丁の宿で軽く麺を食べただけだ。夜になってもまだ亜丁を離れてしまった寂しさから抜け出せず、人恋しくなっている私は運転しているリ・ルー・ハイに声をかけた。

「ねえ! お腹がすいちゃった。一人でご飯を食べるのは寂しいから一緒に行かない? 食事は私が奢るから、どこかいいお店に連れて行ってよ。」

だがリ・ルー・ハイは私が温泉に入っているのを待つ間に食事は済ませてしまったらしく「俺は今食べたばか

りだから、お腹いっぱいだよ〜」とつれない返事だ。

「じゃあ、あなたは食べなくてもいいから一緒にいてよ! 私は寂しくて一人になりたくないの」

もう眠いしあまり気乗りがしないといった様子のリ・ルー・ハイだったが「ちょっとだけ!」と熱心な私の言葉に「まあ付き合ってるか」といった雰囲気「何が食べたいの? 」と私に聞いた。「餃子がいい〜」

3年前に稲城を訪れた際、案内をしてくれた烏里氏に連れて行ってもらった餃子屋が強く印象に残っていた。あの店にもう一度行ってみたいと思い、亜丁に出発する前日にたいして広くも無い稲城の街中を一人でグルグル歩き回ってみたが、見つける事はできなかった。

「君の言っている店かどうかは知らないけど、餃子なら俺の友達の店があるからそこに行こう」

夜の早い稲城の街はどの店もシャッターを下ろしていたが、リ・ルー・ハイの連れて行ってくれた路地裏の小さな店はまだ明かりを付けていた。閉店しようとしていたところに、ぎりぎり滑り込んだような雰囲気だ。

そこは私の探していた思い出の店ではなかったが、こじんまりとした感じの良い店で、リ・ルー・ハイの友達だという若い店主は、閉店間際に飛び込んできた客を迷惑そうな様子も無く受け入れてくれた。「俺は腹いっぱいだから、君が好きなものを頼みなよ」という彼の言葉に焼き餃子、水餃子、青菜の炒め物といった、私の知っているものを数品頼むと、程なくして運ばれてきた料理はどれも素朴な物ばかりながら、私がこの旅で食べた物の中でも一番美味しいと思える味だった。

美味しい、美味しいと喜ぶ私に「この店は稲城で一番旨い店なのさ」とリ・ルー・ハイはちょっと得意そうに答えた。料理を食べながら、この旅行中チベット民族に対して抱いていた、素朴な疑問の数々をリ・ルー・ハイに問いかけてみた。

「ねえ、チベットの人達はとても熱心にお祈りするけど、どんな事を祈ってるの? 」

それまでに通り過ぎてきた何処の街でも、チベット族の人達の信仰心はとても厚く、地面に身を投げ出して、ひたいを地に擦り付け祈る五体投地は有名だし、お寺に来てなにやら熱心に祈りながら、経文の書き綴られたマニ車の周りを何度もグルグル回っていたり、一度回すごとに一度お経を唱えた事になるという、赤ちゃんのおもちゃのようなハンディタイプのマニ車を

暇さえあれば回しているお婆さんを見かけたり、普段の生活と神様への祈りが一体化しているような彼等の様子は、私達がお正月やら旅行先で訪れる神社仏閣で、または困った時の神頼みで時おり思い出したように日常の雑多なアレコレをお願いするのは訳が違う、何やら仏教世界への深遠な祈りが込められているように思っていた。

お坊さんならいざ知らず、普通の庶民までがあんなに熱心に、いったいどんな事を祈ってるんだろう・・・

「え？ どんな事って・・・普通の事さ。例えば、家族が元気で末永く暮らせますように・・・とか」

リ・ルー・ハイは笑いながら言った。

「じゃあ、恋人がいない男の子は彼女ができますように・・・とか？」

「そうそう。それでもし彼女がいる場合は、このままずっと付き合えて、彼女と結婚できますように・・・とかね」

「アハハハ・・・」

何だぁ・・・やっぱり何処の国の人も同じなんだ。なんだかちょっぴり安心した。自分にも彼女がいて、やっぱり彼女との事をお寺で祈っているというリ・ルー・ハイは、私の質問に答えながら家族の事や私がこれから訪れたいと思っているチベット族の土地や、ダライラマの亡命についてチベット自治区以外のエリアに住むチベット族がどのように感じているのかなど、色々な話をしてくれた。

「それじゃあ、あのね・・・」

リ・ルー・ハイの気さくな人柄につられて、私は以前にこの地を訪れた時から気になっていたけど、ちょっぴり人には聞きづらかった事について質問してみた。

「チベットの人達は亡くなったら、その身体を鳥に食べさせる習慣があると聞いているけど、それは今でも行われているの？」



私が海外を旅する事に興味を持ち始め、異国の文化について記された書籍などを読むようになってから得た知識の中でも、各国さまざまな様式で死者を弔うお葬式の習慣は興味深いものだった。

どんな世界に暮らしていようと、人が生きていれば必ず向き合わなければならない人生の終着点である死を、その民族がどのように受け入れ、死者の魂をあの世へ送り出すのかという習慣は、時に国や民族によって大きな隔たりがあり、異国の文化を尊重し理解しよう

という気持ちが未熟だった年若い頃の私には、その文化の違いに戸惑いや違和感を覚えるものも多かったが、特に奇異な印象を受けた弔いの様式の一つが、このチベットの「鳥葬」だ。

書籍の中にはその慣習を日本人の視点からのみ捉えて、ことさら興味本位におどろおどろしく書き立てているような物もあり、その儀式の内に込められた意味など知りもせず、人間の肉体を切り刻み鳥に食べさせてしまうというイメージだけで捉えた弔いの様式は、遺体を仏様と呼んで死化粧を施し、よそ行きの着物を着せて大切に扱うのが一般的な日本文化の視点からみれば、やはり残酷で衝撃的な印象だった。

その後、経験としては未だ乏しい回数ながらも、あちこちの国を旅する機会を重ね、海外に暮らす体験を経ているうち、次第に心の垣根は取り払われていったし、郷に入らば郷に従えとその土地の文化を受け入れる能力が備わってくると共に、異国の慣習を奇異な物に思う感覚は無くなっていったが、それでも「鳥葬」という独特なチベット式の弔いには、どこか強く興味を惹かれてしまう気持ちがあった。

だが「鳥葬」という弔いの存在を知った頃の私が得た情報によれば、チベットを自国の統治下に置こうとする中国共産党の弾圧により、そのような残酷な風習は認めないとの禁止令が出されて、現在では殆ど行われる事はなくなっているというような話も聞いていた。

十数年前にネパールでのヒマラヤトレッキングで赴いたチベット系民族のシェルパ族の村では、村はずれの山を暫く登っていったところに大きな平べったい岩があり、チベット仏教の経文がビッシリと書き込まれたタルチョが張り巡らされて、何か独特の気配が立ち込めている場所があった。その場所がどうも本で得た鳥葬場の知識と一致しているような気がして、同行していたネパール人の友人に尋ねてみたが、彼が村人から得た話では、そのような儀式が執り行われていたのは過去の話で、現在は行われていないのだという事だった。

そんな経緯で、私の中で「鳥葬」は現在のチベットでは殆ど行われていない過去の風習なのだという意識が、勝手に出来上がっていたのだが、それではこの土地に住む人々は、現在はどのように弔われているのだろう。

ネパールの旅でシェルパ族の村を訪れた事があるとはいえ、当時、私の興味の対象はそちらの方向には向いておらず、事実上は三年前の垂丁の旅で、ほぼ初めてチベットの文化や人々の暮らしに触れた事になる。

その時に素朴な疑問として湧いてきたこの質問を、帰りのバスの中で案内人の烏里氏に聞いてみると、答えは意外な事に「鳥葬」だった。え？ じゃあ、あの一緒に山を登った少年も、花園で可憐だった女の子もみんな最後は鳥に食べられちゃうの!? 頭の中では理解しているつもりでも、やはりそのイメージは強烈な印象だ。

もっと深く突っ込んで烏里氏に質問を続けたい気がしていたが、やはり死者の弔いというデリケートな問題に、外国人が興味本位で質問してくる事を、烏里氏が好ましく思わない気配が伝わってきたので、その時の私は沸きあがってくる質問を飲み込んでいた。



「うん、そうだよ。今でもやってるよ」

私がおすおすと切り出した質問に、リ・ルー・ハイはあっけらかんと答えた。

「じゃあ、あなたも？」

「そうさ。俺たちチベット族は、みんな死んだら鳥葬だよ」

それはごくごく普通の事だというのが、彼の話し振りで伝わってくる。

「じゃあ、稲城にもそんな場所があるの？」

「いや、稲城には無い。この辺の人達はみんな理塘に行くのさ」

え？ 理塘？

理塘なら三年前にも訪れているし、今回の旅でも稲城の次の目的地は理塘だ。

あの街に、そんな場所があるのかな？ 前回の旅で一日滞在した理塘の街は、まるで西部劇に出てくるガンマンの様な風貌の遊牧民達が、ゆうゆうと街を闊歩する姿に目を奪われたりはしたが、市場やホテル、ディスコなども有るそれなりに普通の街だった。

「鳥葬の場所って行ってみたいなあ・・・」

私が言うと、

「今度稲城に来た時に、遊びに連れて行ってあげるから俺に電話しなよ。あそこは本当にとっても綺麗な場所なんだぜ!!」

よりもよって、死者の身体を刻み鳥に食べさせるというお葬式の場所に「綺麗なところだから遊びに行こう」と言ってくれるリ・ルー・ハイのくったくのなさが好ましくて、私は思わず笑い声を上げた。



リ・ルー・ハイとの会話はとても楽しかったし、チベット民族の意識や価値観のあり方を教えて貰えた充実

した物だった。お腹もいっぱいになった事だし、店を閉店させるために、私達が帰るのを待っているであろう店主にも申し訳ないので、話の途切れた適当なところで私達は席を立った。もともと眠いからと、私の誘いにも乗り気でなかったリ・ルー・ハイは本当に眠そうだ。

ホテルまで送ってもらうと約束のタクシー代を支払い、次に亜丁に行く時には必ず電話して彼の車に乗っていくという約束をすると、楽しかったひと時のお礼を言って彼と別れた。ホテルのフロントでは、働いているのか同僚とおしゃべりしているだけなのか、まだシャアムウがそこに居たので、お休みの挨拶をしてから部屋に戻った。

今日一日が楽しく終えられたのも、シャアムウが良い友達を紹介してくれたからだ。朝はまだ亜丁にいたのだと思うと、この日も長い一日だった。私はベットに横になったかと思うと次の瞬間には眠り込んでいた。

(次号に続く)

京劇俳優・殷秋瑞さんが読む・漢詩の会 そのII 聴こう！ 読もう！ 読めるようになろう！

殷秋瑞さんの当り役、霸王・項羽が悲憤を込めて全身で唱う「垓下歌(力は山を抜き...)」その他、長恨歌(白楽天)・京劇の中の漢詩、そして古今親しまれている漢詩いろいろ *録音機をお持ちの方はご持参ください。

場所：まちだ中央公民館・視聴覚室

〒194-0013 原町田6-8-1 町田109/6 F

JR横浜線町田駅・ルミネ口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

▲10月8日(金) ▲10:30~12:00

▲参加会費：1500円 ▲定員：30名

殷秋瑞(いんしゅうずい)



中国戯曲大学卒業。顔全面に濃厚な隈取を施す豪傑役俳優。中国戯劇家协会会員/中国演出家協会会員/桜美林大学/多摩美術大学客員講師。得意演目：「三国志」の曹操 張飛/「水滸伝」の魯智深/「霸王別姫」の霸王など。

■9月よりNHKラジオ講座初級中国語で、毎回ゲスト出演。

お申込み&問合せ：☎050-1531-8622(有為楠)

E-mail:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp

【10月の定例会と11月号のおたより発送予定日】

◆定例会：10月13日(水)13:30~

◆11月号おたより発送：11月1日(水)13:30~

共に田井宅です。どなたでもご参加下さい。

ケニアの首都ナイロビの人口は150万とも300万とも言われているが、実際の人口は分からない。ナイロビは、ケニア国内の各地から仕事を求めてくるケニア最大の都市であると同時に、サブサハラアフリカ(サハラ砂漠以南のアフリカ諸国)の国々からも出稼ぎにやってくる国際都市である。また国連機関や各国の報道機関や大使館などのアフリカでの拠点となっており、外国人が大変多い。そんなアフリカ人憧れの都市ナイロビで働くワーキングウーマン達との出会いがあった。

当時、関わっていた仕事で、報告書を印刷することになった。ナイロビ大学の教授が書いた論文に写真やイラスト、地図を加工したものを添付して300ページほどの枚数になるものを現地で印刷して日本に送るという仕事だ。教授が持ってきたタイプや手書きの原稿を見ると、あちこちに加筆・修正・削除のあとがある。日本でなら、そのままこの原稿を印刷所に持ちこんでも何度かやり取りする内に完璧なものになってそれを確認すればあとは印刷所に任せて報告書が出来あがるのを待つのみだろう。しかし、ここはナイロビだ。すこしは苦勞するかもしれないけど、なんとか期日に間に合わせられるだろうと思っていた。

素原稿をタイプ打ちしてもらおう為にナイロビの目抜き通りにあるとある印刷所を尋ねた。ナイロビを歩いていると、看板によく「PRINT」「COPY」という文字が書かれているが、ここは、手書きの原稿をタイプしてくれたり、コピーしてくれたりするところだ。コンビニもなくパソコンも行き渡っていないケニアでは、基本的に町の印刷屋さんをお願いする。一枚いくら、という単位で応じてくれる。

ドアを開けると、女性が5人ほどがパソコンで預かった原稿を打ち込んでいた。仕事を依頼すると、ビックリした表情で「そんな大量の原稿、パソコンに入力したことはありません。写真やイラストも添付したことはありません。どうすればよいか教えてもらえますか?」と訊いてきた。同行のナイロビ大学教授は答えた。「じゃあ、みんなと一緒に原稿を打とう」。

私は、「えー」と内心思っていたが、裏を返せばナイロビの女性たちと働くチャンスだと思って、次の日から一緒にパソコンでの打ち込みに協力する為に、この印刷屋さんに通うことになった。原稿を人数分に分けて、ひたすらパソコンに打ち込んでいく。ワードやエクセルを使いながら、打ち込むのだが、まっすぐにベタ打ちの機能しか使ったことのない彼女たち。改行キーや、タブ機能、イラストや写真の挿入、訂正キー、削除キーを使うこと

もなくキーを打つ。超スローペースなのに、きちんとお茶の時間や退社時間は守る。気が付けば、みんなでおしゃべりは当たり前。「日本はどう?」「どんなファッションが流行?」と、依頼主の私にも沢山の質問があり、手よりも口が忙しい。締め切りを伝えても一日の仕事の分量が変わることはない。「今日はここまで」と、笑顔で開き直る。

驚いたことに、ナイロビ大学の教授も授業の合間にここに来ては、彼女たちにワードの機能を教える。「こうすれば、早いよ」「ここは、こういう風にすると見易いよ」など、いやな顔をせず懇切丁寧に説明をしている。さすが先生だ。

お茶タイムは一日に2回あって、チャイというケニアのミルクティーを魔法瓶に入れて売りに来る男の子が人数分を入れてくれる。デリバリーというわけだ。お菓子を片手に、本当によくしゃべる彼女たち。彼女たちを雇っている社長さんもよくこのお茶タイムには現れ、みんなで冗談を言ったりして楽しい時間を過ごす。

仕事が終わると、お化粧直しに忙しい彼女たち。流行のキラキラ光るバックから携帯を取り出して、「彼が今日は会社まで迎えに来てくれて、一緒に帰るのよ」と本当に幸せそうに話してくれる。彼女の愛読の雑誌はナイロビで働く若い女性の為の情報誌「eve(イブ)」だ。内容はまるで日本のそれと同じだ。ファッション、話題の本、ネイル、音楽、男性観や話題の場所。世界中年頃の女性たちの関心は変わらないようだ。

原稿の打ち込みは3日の予定をはるかに越えて3週間もかかった。もちろん資料を受け取る日本側としてはこのスピードでは仕事になっていないし、その後大目玉を貰った。しかし、今でもその報告書を見ると彼女たちの笑顔と共に一緒に過ごした素敵な時間が思い出される。「仕事は楽しくやらないと、人生がつまらなくなるじゃない?」と笑った女の子がいた。

その時は「後で怒られる私の身にもなって。仕事はまじめに時間通りしてこそ、お金が貰えるのよ」と怒ってしまったが、その彼女はその稼いだお金をぎりぎりまで田舎に送金して田舎の家族を養っていた。自分はナイロビの狭い相部屋に住み、「クリスマスに帰ることだけが楽しみ」と言っていた。見た目は、おしゃれで現代的な彼女たち。しかし、知れば知るほど、背負っているものは重く、しんどい人生を楽しく生き、笑顔で乗り越えていこうとするたくましさなのだ。

それに気が付いたのは、ずっと後のことになってしまった。ごめんなさい。

監督・任書剣さんが熱く語るメッセージ「人は、国や民族を超えて分かり合える！」

映画上映会(主催:町田国際交流センター・協力部会)

「私の叙情的な時代」(99分)監督:任書剣 **無料**

びあアワード2009・企画賞/技術賞/観客賞(福岡/名古屋)受賞作品

- 2010年10月22日(金) 19:00 上映開始(18:30 開場)
 - 場所:町田市民フォーラム・3Fホール(定員:188名)
 - お申込み方法:「わんりい」会員と関係者の皆様は、下記の「わんりい」事務局に電話又はE-mailでお申込みください。但し、定員になり次第締め切りになりますのでお早目のお申込みをお願いします。
- ☎: 042-734-5100 / E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



せんし 中国剪紙(切り紙)展

黄河流域に広がる黄土高原の地で親から子へと伝えられてきた剪紙には、この厳しい大地に住む人々の願いと祈りが込められています。(今月号8～10ページ、丹羽朋子さんの文章を参照下さい)

2010年10月17日(日)～12月19日(日)

9:00～17:00(休館日:火曜及び祝日の翌々日)
一般350円/小中学生及び65歳以上無料

於:埼玉県山西省友好記念館・神怡館

〒368-0201 埼玉県秩父郡小鹿野町両神薄2245
<http://www.18.ocn.ne.jp/ogano/shenyi.html>

【剪紙提供】日中文化交流市民サークル「わんりい」& 上河内美和(剪紙作家) 【映像提供】丹羽朋子(東京大学大学院文化人類学研究室博士課程) 【主催】(財)小鹿野町振興公社

【問合せ】神怡館 ☎ 0494-79-1493 / FAX 0494-79-1489

体の免疫力を高める! 特別体験講座
誰でもができる究極の養生運動を体験しよう!!

取って置きの、張紹成オリジナル
新・気功体操とエクササイズ

✳ 2010年11月12日(金) 14:00～15:30

✳ 於:鶴川市民センター・第二会議室

✳ 参加会費:1500円 ✳ 定員:25名

◆ 問合せ: ☎ 042-734-5100 「わんりい」
E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp

【張紹成・プロフィール】

中国戯曲大学卒業。京劇の花形俳優として、激しい立ち回りを役どころとし国内外で活躍の傍ら、中国武術家、気功の指導者としての多彩な経験をもとにオリジナル健康エクササイズを編み出し好評を得ている。「全国設計事務所健康保険組合」で講師/大阪樟蔭女子大学の非常勤講師



* 詳細は、<http://www.kyogeki.info/>

日中友好会館

第20回(2010年度)中国文化の日・記念展覧会

「中国漁民画展」 入場無料

● 9月27日(月)～10月24日(日) 10:00～17:00
※(10/9、10のみ21:00まで開館) 火曜休館(10/12は開館)

● 於:(財)日中友好会館/美術館

舟山諸島の島民(漁民)が描いた「漁民画」の展示。漁民画は、古くから庶民の間で描かれていた絵を元に、1980年代初頭に現代民間美術として発展した。

● 関連イベント:【漁民画画家による作品解説】

舟山の漁民画画家で漁民画芸術発展に尽力された方が来日し作品について解説。予定日:10月9日(土)、10日(日)

◆ 日中友好会館へのアクセス:都営大江戸線・飯田橋C3出口より徒歩約1分/JR、地下鉄・飯田橋駅より徒歩7分/丸ノ内線・後楽園駅より徒歩10分

◆ 問合せ:日中友好会館 ☎ 03-3815-5081(担当:小林)

* 詳細は、<http://www.jcfc.or.jp/> をご覧ください。

写真展〈劉徳有所蔵アルバムより〉無料
～わが人生の中日友好交流～

2010年9月18日(土)～10月15日(土)(土・日休館)
10:30～17:30

http://www.peoplechina.com.cn/zhongrijiaoliu/2010-09/20/content_299424.htm

於:東京中国文化センター

港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F 日比谷線「神谷町」駅4番出口より徒歩約5分 銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩約7分

● 主催:中国对外文化交流協会、中国国家博物館、東京中国文化センター

● 後援:中国大使館 他

劉徳有先生は、1950年代より中日友好事業に従事し、毛沢東や周恩来などの国家指導者の日本語通訳を務める傍ら新華社の特派員として15年間日本で活躍された、中日友好交流の歴史の証人です。1950年代より約60年間にわたる中日友好交流事業と中日文化交流事業が劉徳有先生所蔵の多数の写真を通して紹介される。

【問合せ】東京中国文化センター

☎:03-6402-8168 / Fax:03-6402-8169
E-Mail: ccctok@hotmail.com